

## 式辞：「生涯の学び人として」

恵泉女学園大学 学長 大日向雅美

皆様 本日はご卒業、おめでとうございます。  
ご家族・保証人の皆様にも、心からお祝いを申し上げます。

4年前の入学式で、私は「新たな学びを この恵泉で」と題した式辞で皆様をお迎えいたしました。「若いということは、変われるということです。明日からの大学生活で存分に学んでください。皆様が恵泉での学びを通して、どんな未来をみつめ、どのように世界との関係を紡いでいかれるのか、そして、それがご自身のたしかな未来へとつなげていただけることを期待しております」と申し上げました。

私が皆様に願った学びとは、知識にとどまらず、知識を通して“人としての生き方”を学び、それを実践していくことでした。

学長という立場上、日々の授業で皆様と多くの時間を共有することは叶いませんでしたが、4年間を通して積み重ねる「生涯就業力 STEP」の授業や数々の大学行事で、皆様の学びの姿を拝見しておりました。学長室を訪ねてくださった方々と言葉を交わす嬉しい時間にも恵まれてきました。

多摩キャンパスでの学びを終える日が近づくにつれて、「この大学での学びをこれから生きる支えとしたい」と語ってくださる学生が何人もいました。

こうして皆様がこの多摩キャンパスで確かな学びを得られたことに、深い安堵と誇りを覚えております。

皆様の4年間は、まさに特異な時間だったと思います。

高校2年生の時に、未曾有のコロナ禍に見舞われ、高校生活に制約を受けて入学し、ようやく落ち着きが見え始めた大学生活の矢先に、本学の募集停止と数年後の閉学の知らせを受け取られました。

皆様の驚き・不安・悲しみを思い、教職員一同、胸が張り裂ける思いでした。

私たちに残された願いはただ一つ、皆様が本学での学びを成就できるよう、最後まで力を尽くすことでした。

その願いに力を与えてくれたのは、他ならぬ皆様の姿でした。

「閉学になる前に恵泉の学びを身につける機会を与えられたのだ。それを無駄にしたい！」と語り、授業や行事に真摯に向き合い、先輩たちの足跡を継ぐことを熱心に考え、それを恵泉祭のテーマにも掲げられました。

その姿は、まさに本学が掲げる生涯就業力、すなわち「いつ、なにがあっても、どこにあっても、生涯にわたって自分にふさわしい目標を探し続け、自分を大切にすること。自分の大切さを知る人として、身近な方や地域、社会に尽くすことに喜びを見出す力」を体現するものでした。

とは言え、日々、不安に揺れ、将来を思って立ちすくむこともあったことでしょう。

実は皆様以上に、私自身が揺れました。やがて訪れる閉学という現実を前に、人としての心の弱さや未熟さに苦しむ日も少なくありませんでした。そんな私を支えてくれたのは、共に力を尽くしてくれる教職員の存在、そして、未来に向おうとしている学生の皆様の健気な姿でした。

人生には、不運と幸運が重なります。できれば幸せや成功だけに彩られた日々を過ごしたいと思うこともあります。

しかし、幸運は不幸な出来事の姿をしてやってくることがあります。

さきほどキリスト教教育主任の宇野先生にお読みいただいた聖書コリントの信徒への手紙には、「わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれる」と記されています。

皆様が経験された艱難はけっして軽いものではありません。しかし、だからこそ、人生のすべての出来事を受け入れ、そこに意味を見出していく覚悟の大切さを思います。

不運にめげず、目指す何かを常に心に秘めて、汗や涙を流しながらも未来に向かって進もうとする姿には、人としての美しさと知性が宿ります。

皆様はまだ20年と少しの時を歩まれたばかりです。この先、その何倍もの時間が与えられています。どうか恵泉女学園大学で育まれた「生涯就業力」の学びを続け、ご自分を大切にする力、共に生きる方々の光となる力を、さらに磨き続けてくださることを願っております。

最後に、ご家族・保証人の皆様には、大切なお嬢様を最後まで私どもに託していただきましたことに心から感謝申し上げます。

本学閉学の後も、本学で学ばれたことが、この先のお嬢様の人生の中で静かに息づき、凜として確かな歩み続ける支えとなることを私ども教職員一同、心から願い、祈っております。

学生の皆様、ご家族保証人の皆様への感謝と共に、お幸せをお祈りして、本日の式辞とさせていただきます。

以上